

《インタビュー記録》

## 歴史教育体験を聞く

### 鬼頭明成先生

日 時：2023年10月14日

場 所：東京都町田市

聞き手：茨木智志・大木匡尚

#### はじめに

「歴史教育体験を聞く」の目的は、歴史教育に携わってきた先生がたの歴史教育の体験、すなわち自分が受けてきた歴史教育、そして自分が行なってきた歴史教育の話を中心として、さまざまな経験や思いをインタビューの形で聞き取り、その記録を活字にすることで、歴史教師の共有の財産とすることにある。

今回のインタビューは、鬼頭明成（きとう あきなり）先生がお引き受け下さった。鬼頭先生は1940年9月東京のお生まれで、大学卒業後の1963年に東京都立高校に就職し、退職された後は特任で大学でも教鞭をとられてきた。その間に、民間教育団体を通じて歴史授業、特に日本史授業の検討を進められ、多くの論考を発表されてきた。

以下は、鬼頭先生のインタビューの記録である。

#### 1. 生い立ち

— 本日はよろしくお願ひいたします。まずは生い立ちから伺ひます。お生まれはこちらのお寺になりますか。

そうです。生まれたのは1940年9月3日です。妻の勤務地の関係で、成城（世田谷区）と富ヶ谷（<sup>とみがや</sup>渋谷区）に2年ずついたことがありましたけれども、後は、ずっとここです。南多摩郡<sup>ただお</sup>忠生村でしたが、1958年に町村合併で町田市に変わりました。

— 戦争が終わったとき（1945年）は5歳かと思いますが、当時のことは、ご記憶にありますか。

---

<sup>1</sup> 曹洞宗眞峯山圓福寺（東京都町田市）。

品川区の鈴ヶ森小学校<sup>2</sup>が学童疎開で来ていました。忠生村のこのお寺は6年生の女の子、隣のお寺は6年生の男の子、旧町田町へは品川区からの疎開が多かったようです。どのくらいでしたか、記憶にありませんが、学童疎開が始まってからですから、2年くらいでしょうか。本堂に寝泊まりしていました。こっちはまだ本当に子どもなので、疎開で来ていた子たちに可愛がってもらったという、そういう薄っすらとした記憶があります。

それから防空壕ですね。この家の裏手の駐車場になっているところも、掘って防空壕にしていました。サイレンが鳴ると、絵本などを風呂敷に入れて駆け込んで、かび臭いにおいがしたりジメジメして、そういう感覚的な記憶があります。

— この辺は、実際に空襲を受けたのでしょうか。

みんな黙っているというか、言いたくないというか、この近くでも<sup>おのじ</sup>小野路というところの万松寺というお寺に爆弾が落とされました。何にもない山の中ですよ。噂では、爆弾を持って帰らずに捨てて行ったのだらうとも言われています。また、別の家では、防空壕の真上に落ちたものだから、そこに避難していた家族の半数以上が死んでしまって、私の知っている人はたまたま防空壕から出ていたから助かった。それで、自分だけが生き残っているのかと、そういう影の部分で亡くなるまで引きずっていて。そんなことを、その人の子どもさんに話したこともあるのですが、「お母さんは奇跡的に生き残ったけれども、兄弟がみんな亡くなってしまって、笑顔を見せることがほとんどなかった」と聞きました。

— 小学校入学は1947年かと思いますが、近くの小学校でしょうか。

忠生小学校<sup>3</sup>です。近いと言っても、子どもの足では1時間近くかかりました。

— ちょうど新しい学校制度が始まったときで、“社会科1期生”になりますが、社会科は覚えていますか。

中身は覚えていません(笑)。後で、自分自身で勉強するようになって、そうだったなという感じの印象ですよ。俗に「ごっこ学習」といわれる、何々をやってみようという、あるいは模擬体験をすとか、そういうカリキュラムはあったのかなど。

---

<sup>2</sup> 品川区立鈴ヶ森国民学校：現在の品川区立鈴ヶ森小学校（東京都品川区南大井）。

<sup>3</sup> 南多摩郡忠生村立忠生小学校：現在の町田市立忠生小学校（東京都町田市忠生）。

小学生のとき、もっぱら記憶にあるのは遊んだことだけです（笑）。学び舎<sup>あそび</sup>と言っても遊びを学ぶ感じですよ。そのころ、まだ小学校の敷地内に教員宿舎がありました。奉安殿は記憶に残っている限りでは取り壊されていたので、取り壊す前の奉安殿は体験していません。小学校は明けても暮れても遊び、遊びで、学校から帰るなり、かばんを放り出して、そこの鶴見川に泳ぎに行っていました。当時はへびも一緒に泳いでいたり、飛び込むと土煙が上がったり、泳いだ帰りに畑のスイカをかつぱらって、この庭に来て割って食べたり、そういう点では本当に学校というもののイメージが今とは全然違いますよね。

## 2. 中学校から高校へ

— 1953年に中学校入学かと思います。印象に残っていることをお聞かせください。

忠生中学校<sup>4</sup>です。中学校ではテニス部でした。クラス会かなにかで話に出てきたことですが、戦後になって、戦争は終わったんだ、戦争はしてはいけないんだという、そういう空気は非常に強かったですね。たとえば、映画教室。わざわざ町田の街中にある映画館まで歩いて行って、見た映画が「鐘の鳴る丘」等、戦争批判的な、ストレートには出していないけど、そんな映画を映画教室で見ました。ですから、先生がたの間に新しい戦後教育というのが、具体的にどういう形でといったものでなくても、やっぱり流れていたのかもしれないと思います。

— 先生がたは、戦争から帰ってきた方々とかでしたか。

そういう人は知らないですね。若い先生たちでした。こんな<sup>へんぴ</sup>辺鄙なところだから、ここなら<sup>あ</sup>空いているということではないかと思います（笑）。

— 当時は学級も生徒も多かったと聞いていますが、いかがでしたか。また、皆さん、忠生中学校に行かれたのですか。

中学校は、1学級50人以上でした。小学校から中学校に行くときに、私のところは居つきの人間で、父親が役場に勤めていて教育委員とかやっていたから、誰いともなしに地元の学校に行きました。人によっては私立中学校に行くとか、住所を移して町田の町立学校とか、八王子の市立学校とか、クラスの中の何人かはそういう形で進学したのも多いです。

---

<sup>4</sup> 南多摩郡忠生村立忠生中学校：現在の町田市立忠生中学校（東京都町田市忠生）。

— 当時の中学校社会科では日本史が別枠で設定されている場合がありますでしたが、いかがでしたか。

それは、なかったと思います。

— 高校入学は1956年になるかと思いますが、どちらの高校でしたか。

国立高校<sup>5</sup>です。9科目受験の時代です。

— ここからですと、相当に時間がかかったと思いますが、どうやって通われましたか。

自転車で淵野辺<sup>ふちのべ</sup>駅（神奈川県相模原市）まで行って、横浜線で八王子駅、そこから中央線で国立駅。もう一つは鶴川駅から小田急線で登戸駅（神奈川県川崎市）、南武線で谷保駅。谷保駅も国立駅も駅から歩いて学校までは同じ時間だったかな、1時間半はかかったかと思います。

— こちらから国立高校に行く人は多かったのですか。また、なぜ鬼頭先生は国立高校に行かれたのですか。

多くはないです。普通は町田高校<sup>6</sup>、あるいは八王子の南多摩高校<sup>7</sup>でしたね。

あのころも成績順にランク付けがあって、立川高校<sup>8</sup>か国立高校かというところに成績がありました。立川はまだ駐留軍が大きな影響力を持っていた時期で、風紀の乱れのようなこともよく言われていたのですよね。国立は親戚もあったものですから、こっちの方が安全だというふうに決まってしまったという感じがしますね。

— 鬼頭先生が高校に進学された1956年のころは、まだ高校進学率がそれほど高くなかった時期かと思いますが。

---

<sup>5</sup> 東京都立国立高等学校（東京都国立市東）。

<sup>6</sup> 東京都立町田高等学校（東京都町田市中町）。

<sup>7</sup> 東京都立南多摩高等学校：現在の東京都立南多摩中等教育学校（東京都八王子市明神町）。

<sup>8</sup> 東京都立立川高等学校（東京都立川市錦町）。

私が高校に入るときは、高校に進学する子どもと、そこでもう就職する子どもと大体半々でした。そういう時代ですね。とにかく受験という雰囲気の中で全くないというお土地柄ですから。でも、学校はそうも言っていないので、少しでも良い学校に子どもたちを行かせようというところから、進学クラスと就職クラスに分けていました。進学クラスがデスクワークやっている間に、就職クラスは学校の敷地内にある畑で肥料やったり作物作ったり、体験学習と言えは聞こえはいいですけど、いわゆる差別ですよ。いまだにそのことは傷になって子どもたちの間に残っています。要するに、「お前は進学コース」、「お前は就職コース」と。

— 進学希望者が受験をしたというわけではないのですか。

人数の関係もあるけど、器が限られていました。全体で4クラスだったんです。希望を取れば半数の2クラス以上の子どもたちの親が進学させたい、勉強させたいと考えたのですが、キャパがないものだから、「お前は駄目だ」と就職クラスにまわされる者も出てきました。

— 中学校の中で、ですか。

そう、中学校の中で、です。後に言われるほどの校内暴力事件はないけれど、でもそのことから来る<sup>うら</sup>妬<sup>ねた</sup>みみたいのが子どもの中にも反映して、暴力事件のようなものは結構ありました。

— 進学クラス・就職クラスのようなものは、その頃は普通にあったのですか。

ありました。学年統一の模擬テストをやって、成績順に廊下に名前を貼り出ししてしていました。進学熱というのはかなりレベルが向上してから、よい学校に入れるためのものでしたが、私が体験したのはそれより前の進学させてもらえるか、親もさせたい、子どもも行きたい、けれども中学校のうつわがそういうふうになるとバランスが取れないので、ボーダーラインにいた生徒というのは泣く泣く就職コースに入ってしまったという。当時、自分だけの体験かも知れませんが、進学コースか就職コースかというのは、いやも応もないという感じでしたね。子どもも自分はこの辺のところだからと、運命づけられていたというか。3年生のときだったと思います。男女比は自然に任せてバランスが取れていたと思います。

### 3. 東京都立国立高校

— 1956年4月に入学された国立高校での生活は、どのようなものでしたでしょうか。

文化祭となると、私の時代だから、長崎の「平和の像」の、でっかいの作って、それで反戦をPRしたりしました。それから、そのころ映画にのめりこんでいたものだから、新聞部に入ったんですよね。学校批判とか社会批判のような記事を書いたりしていました。それで、立川の映画館の広告をもらって新聞に載せたりして、今なら認められないでしょうが、掲載代金ももらったと思いました。広告をもらいに行く、代金をもらいに行くと、ただで見せてくれました。高2のときかな、ひと月で何回も映画を見にいきました。そのころは今にしても良い映画があったんです。1950年代の後半で、「シェーン」とか、「エデンの東」とか。映画館で券もらって映画見て帰って、遅くなると親に怒られるものだから、午後はサボって映画見ちゃうという、先生がどこまで知っていたのか分からないけど（笑）、そういうワルが結構存在しえたという時代でもありました。

— 社会科は1951年度版の学習指導要領の時期かと思いますが、いかがでしたか。

「一般社会」はつまらなかった思いがあります。3年生の「時事問題」は非常にシャープでした。「日本史」は松井という考古学の先生でした。「世界史」は園山先生。「人文地理」もありました。

それから直接は教わらなかったけど新聞部の顧問で薫陶を受けた人で、後に文部省の審議官になる佐藤照雄<sup>9</sup>先生がいました。都立高校の教員採用試験を受けて合格したときに、最初に挨拶に行ったのが佐藤先生でした。

— 個性的な先生がたが多かったと聞きますが、いかがでしたか。

結構、露骨に自分の考えを出す先生が多くいて、それなりに面白かったですね。学校の雰囲気なのか、社会科とかでも「これ覚えなさいよ」、「大切だよ」という、そのような授業する人は佐藤さんなんか含めていなかったですね。なんか人間性が彷彿とさせられるような、そういう、授業の中身というよりも、何か一つ、学問を持っていて先生が多いかなと言う感じがしました。漢文の先生は、人間的にも授業を通して非常に教師へのあこがれを持たせる授業でした。そのような先生が色々な形で

---

<sup>9</sup> 佐藤照雄：1926～2009年、社会科教育・日本史。

多かったのではないかと思います。

ちょうど私の高校時代というのは勤評闘争<sup>10</sup>が盛んにおこなわれたときで、ストライキなんかも結構ありました。それで残った教員の数が足りないものだから校庭に集められて訓話を頂戴するようなことがありました。自分が信奉していた、その漢文の先生が、「先生がたは、これこれ、こういう事情で学校に来ない」と。生徒から見ると、みんなストライキで学校に来ないで、どこかに行っているにもかかわらず、自分が崇拝していた教師が残った中にいるという、なんか自分の期待が裏切られたようでもがっかりした記憶があります。

— 生徒は教員のストライキを好意的に見ていたのですか。

そうみたいです。今となつては、よくわかりませんが、…。

#### 4. 早稲田大学教育学部と安保・教育歴研

— 1959年の国立高校卒業後に、早稲田大学教育学部に進学されています。教育学部というのは教員になろうと思ったからですか。

そうです。

— 教員志望は高校生の頃からですか。

ずいぶん早かったですね。中学生のときからです。結局、自分はこの寺の後を継がなくてはいけないというのが潜在的にあつて、教員は寺の兼職が許されていました。そういう選択を迫られる身から考えると、もう宿命としてそれがあつて、寺の住職をしながら他の仕事と言うと、教員というのは一つの選択肢でした。もう一つは小・中・高と先生に恵まれていました。だから先ほどの漢文の先生も含めて教師へのあこがれのようなものがあつたのですかね。中学校に宿直室があつて、毎日誰か宿直室に寝泊まりしている時代でしたが、新里金福先生あらきときんぶくという沖縄出身の先生がいて、その先生の沖縄の話が面白くて、夜遅くまで、その先生から話を聞いていたりしました。そういう自分の教師に対する体験が自分にスライドして教師願望になっていったのかもかもしれません。ただ、小説も好きだったし、ジャーナリズムに対するあこがれもありました。

---

<sup>10</sup> 勤評闘争：教員への勤務評定に反対する闘争。1958年頃を中心に、反対する教員への幅広い支持のもとで展開された。

大学に入ったときは教師というのが頭の片隅にあって、あるいは一方ではジャーナリズムもあって、その辺がないまぜにあって、選択したのかもしれませんが。だから大学でのコースも文学を志して、文学部という面もあるにはあったのだけれど、その両面をかなえられるという早稲田の教育がいいのかなと。あまりはっきりした根拠のない選択だったのですが。

— 大学を受験した時点で日本史を専攻すると決めていたのですか。

いや、それも曖昧ですね。東洋史も面白いという感じもありました。

— 指導の先生はどなたでしたか。

藤村道生<sup>11</sup>さんです。ただ、指導を受けた記憶はないですね（笑）。

高校のときは勤評闘争で、1959年に大学に入っていくなり安保（1960年）<sup>12</sup>でした。2年生のほとんどが国会通いだったり、警視庁前だったり、家を出て学校に行くのではなく集会の場所に直行して、帰りに大学に寄っていくかという感じでした。大学時代で今日までの自分のバックボーンになっているのが、色々な意味で安保です。それからもう一つ、教育学部歴史学研究会（教育歴研）です。

— 教育学部歴史学研究会について、お聞かせください。

入学して、教育歴研というサークルに入りました。そこで『資本論』だとか、『ロシアにおける資本主義の発達』だとか、『矛盾論』だとかの読書会に明け暮れて、洗脳されたというか（笑）、分からないけど、だから勉強したかという、まともな勉強はしてないですね。

教育歴研の中で信州長野県の下伊那<sup>13</sup>（しもいな）<sup>13</sup>に行って古文書を見せてもらって、そこから当時のあの辺の江戸末期の商品流通の歴史を学んでいこうという研究テーマがありました。サークルの中の一つの作業として、そこで春休みとか夏休みとかに、男女含めて10人以上、<sup>ちさん</sup>稚蚕飼育場という蚕を飼う棚がある家があって、そこに泊ってもらって、古文書を読んで写し取っていくというようなことを3年間くらいやったかな。昼

---

<sup>11</sup> 藤村道生：1929～1999年、日本史。

<sup>12</sup> 60年安保：岸信介内閣が進める日米安全保障条約改定（1960年）をめぐる、大規模な反対運動が展開された。

<sup>13</sup> 下伊那：長野県最南端に位置する飯田市と下伊那郡の地域。

間はそういう作業をやって、夜は地元の青年団の人たちが来るんです。下伊那というのはそういう戦前から青年団活動が盛んで、安保が吹き荒れているなか東京から学生さんたちが来るというので自転車で1時間かかるというようなところからはるばるやってきてディスカッションみたいのをやりました。それも広い意味で自分の研究をしていく上に糧<sup>かて</sup>になっていたのかなという感じがありますね。

— 下伊那での活動は以前からあったのですか。

そうです。同じサークルの中で私はそういうことをやっていた。その後、内紛というか、「この大事な時期に何をお前らやっているんだ」と、「学生が研究をすっぽらかして国会がよいしてそれが何になるんだ」という対立がサークルの中でも起こってきて、それに当時の全学連の主流派と反主流派とがあって、自然と色分けされてきました。1970年代に入ると、「お前ら、何しに来た」と言われるような感じで、サークルの部室に簡単に足を踏みこめない、そんな感じになりましたね。

— 卒業論文のテーマは何でしたか。

商品流通の進展がもたらした農村構造の変化です。<sup>さんしゅう</sup>三州街道という名古屋から中山道と東海道の間を通る飯田を通過して諏訪に抜ける天竜川沿いに、一つの商品流通のルートがありました。その主な商品が生糸で、下伊那も活気を帯びていました。私としては珍しかったんですよ。三州街道でこんなにモノや人が動いていたのか、それをもう少し明らかにしてみようと。ただ、江戸時代に栄えたところがどんどん没落していくんですよ、ここ（町田）もそうですが。文書も途中まで来るのですが、途切れてしまう、記録が残されていない。自分の力量の問題もあるのだけど、そんなこともあって、中途半端な論文に終わりました（笑）。都立大（東京都立大学）の北島<sup>まさもと</sup>正元<sup>14</sup>さんの近世史の本をベースにして、今の課題を自分なりに検討してみたというのが卒論でした。

— 研究会で勉強されたという感じでしょうか。

そうです。本当に、なにになに先生というよりも、早稲田大学というよりも、そのサークルで勉強しました。

---

<sup>14</sup> 北島正元：1912～1983年、日本史。北島正元『近世日本農村社会史』（雄山閣、1947年）、同編著『江戸商業と伊勢店』（吉川弘文館、1962年）などがある。

— 先ほど、お寺を継いでというお話がありましたが、鬼頭先生が継ぐことは決まっていたのですか。

なんとなく、ですね。父は何も言いませんでしたが、母からは「檀家さんがあって、お前は大学まで行けるんだから、感謝の気持ちを忘れちゃだめだ」と言われていました。

— 曹洞宗でしたら永平寺（福井県）で修行をされてですか。

永平寺ではなくて、その系統をふんでいる西有寺<sup>さいゆうじ</sup>という寺が横浜にあります。大学生のときに、いくつか区切ってそこで修行して、修了して資格を取りました。

— 教員免許もお取りになってと思いますが、教育実習はどちらでしたか。

町田高校です。知っている先生がいましたし、近いところだという気持ちがあります。

— 早稲田大学の教育学部では、教員になる人は多かったのですか。

少ないですね。もちろん、教育学部はもとは高等師範部ですから、他の学部に比べれば多いです、他の私立大学に比べれば、多いと言えば多いですよ。ただ、東京教育大（現・筑波大学）や東京学芸大に比べれば少ないですね。やっぱり教員になるか、ジャーナリズムの世界に入るか、出版社とかが主流ですね。

## 5. 都立高校への就職から定年退職後まで

— 1963年に大学を卒業してすぐに都立高校で教職に就かれてとのことですが、専門の日本史で入られてですか。

採用試験は地理で受けました（笑）。というのは、中学校のときにお世話になった先生が高校の教師になっていて、新設校があるので、社会科なら採用人数が多いと思われる地理のほうが合格しやすいだろうという判断からの選択でした。1年生は地理でしょう。だから、1年で地理を教える教師が必要になることはわかっていました。

— 履歴を拝見すると、1963年から町田工業高校<sup>15</sup>に5年ほどいらして、1968年に城北高校<sup>16</sup>に移られて4年で1973年に小石川高校<sup>17</sup>にとあります。それぞれずいぶん雰囲気が違ったかと思いますが。

そうですね。町田工業は自分の教科の勉強どころではなく、生活指導で大変でしたね（笑）。城北は割合に大人しい。もともと女学校ですからね。

— 小石川高校に8年いらして、1980年に戸山高校<sup>18</sup>に異動されています。私（茨木）が初めて鬼頭先生にお会いしたときは戸山高校の先生でした。

戸山高校には13年くらいいました。

— それで1993年に町田高校に移られて、8年いらして定年で退職されています。町田高校には鳥山孟郎先生がいらしたと思いますが、同僚だった時期は長いのですか。

短いです。鳥山さんから町田高校が空くから来てくれと誘われての異動でした。あの頃は教員の選考も教科内で目星付けて、教科内でやりとりがあって移る。そういう時代なんですよ。

— 2001年に定年退職されてから成瀬高校<sup>19</sup>で嘱託をされて、成瀬を終えた2006年から、立正大学心理学部特任教授をされています。立正大学では歴史の授業担当でしたか。

立正大学では専任になる前から非常勤をしていたので並行していました。歴史と教科の教育法も担当していました。浪本勝年さんから声をかけられました。75歳までいたと思います。松本通孝さんが私の入れ替わりくらいで立正大学に来ました。

— 都立高校では新宿の戸山高校に長くいらして、定年前にご自身がお住いの町田の町田高校に移られていますが、二つの高校は違いがありますか。

---

<sup>15</sup> 東京都立町田工業高等学校：現在の東京都立町田工科高等学校（東京都町田市忠生）。

<sup>16</sup> 東京都立城北高等学校：現在の東京都立桐ヶ丘高等学校（東京都北区赤羽北）。

<sup>17</sup> 東京都立小石川高等学校：現在の東京都立小石川中等教育学校（東京都文京区本駒込）。

<sup>18</sup> 東京都立戸山高等学校（東京都新宿区戸山）。

<sup>19</sup> 東京都立成瀬高等学校（東京都町田市成瀬）。

違いはあると思います。戸山は自由な雰囲気が強くて、思考の幅が広いというか、教養の積み重ねが小さい頃からあると感じました。町田の場合は、自分が生まれ育っているから言えるのかもしれませんが、欲がないというか、のんびりしたところが良くも悪しくもあって、現状に満足してしまっ、おっとりしていると感じることがありました。まあ、分からないですね（笑）。生徒も親も一つ違うなと感じたのは戸山ですね。

— 〈親も〉というのは、どういうことですか。

戸山のときの生徒の親たちが「今度は私たちに教えてください」と言って、最初のうちは史跡めぐりのようなことをしていて、その後デスクワークがしたいと変わってきました。「誰か報告する人がいてなら、いいですよ」と始めて、どうしてもこっちの話が中心になってしまいますけど、3年前まで勉強会をしていました。今はコロナで中断したままですが、ふた月に1回くらいで50回は超えたかと思います。あじさい会と言います。生徒はともかく親のほうが、そういう思考というか、行動に移す考え方というのは、こっちには少ないかなと思います。たくさんいる保護者の一例ですから、それをもって特徴とは言えないとは思いますがそれでも。

## 6. 歴史教育者協議会（歴教協）などでの活動

— 鬼頭先生は歴史教育者協議会（歴教協）で活動を継続されていますが、いつ頃から参加されたのでしょうか。

早くからで、教員になって10年くらいでしょう。文京歴教協<sup>20</sup>です。

— 小石川高校の頃と思いますが、どなたかに声をかけられたとか。

そうです。本多公栄<sup>21</sup>さんです。

— 本多先生とはどのようなご関係でした。また、本多先生はどのようなかたでしたか。

---

<sup>20</sup> 東京都歴史教育者協議会文京支部。

<sup>21</sup> 本多公栄：1933～1995年、社会科教育・歴史教育。

大学の先輩になります。学生の頃は知りませんでしたが、存在そのものは大学のサークルで「先輩にこういう人がいる」と、仲間を通じて知ってというような気がします。10 歳くらい違うのかな。本多さんはあたりの柔らかい非常に温和な人です。ただ、意志は強いですからね。

— それまで他の研究会とか参加されていたわけではなかったのですか。

そうです。たぶん学校が近くなったという時間的、精神的な余裕ができたところで、歴教協に入って活動するようになったということではないかと思います。

— 文京歴教協はどのような活動をされていたのですか。

それぞれが、自分が直面する問題を出し合うというような形でもって学び合っていたような気がします。

— 鬼頭先生の本が書かれたものを見ると、方向がはっきりしているように感じます。それは小石川高校にいらして文京歴教協に参加されての頃に固まっていたのかと思いましたが、いかがですか。

これに取り組んでいる、というほどのことは、できてなかったと思います。模索していたということではないかな。今になって考えると、安保が自分を生み出し、歴教協が自分を育てたとそんな感じになるのですよね。だからそういう意味で言えば、育てられるような刺激が当初の歴教協の活動の中で得られたということかもしれません。

— 鬼頭先生は高校で、本多先生は中学校ですが、中高の先生がたが中心ですか。また、小石川高校にいらした時期からだと鬼頭先生は 30 歳過ぎくらいになります。メンバーは同世代のかたがたでしょうか。

小学校は少なく、中学校が多かったですね。集まるのは 10 人とまではいかなかったです。自分は若いほうでしたね。

— 文京歴教協に参加されて、その後に移転や異動されても文京でしたか。

はい、そうです。ただ、全体の歴教協の中で常任委員を依頼されて、組織部に入って組織づくりをしたり、『歴史地理教育』の編集部で編集長になって、全国の会員の原稿を集めたりとか、そういう仕事を中心になって、もっぱら本部での仕事になりました。それでなかなか顔を出せなくなりました。

— 歴教協の関係であちこち回られてですか。

大会が全国で行なわれますからね。ここのところ数年を除いてずっと参加しています。最初は東京大会であったかと思います。逆に、東京にいて全国から代表が集まってくる集会もあるわけです。同じ人間が発言しても、そういうときに発言される重みと、こっちから大阪や仙台とか向こうの大会に参加させてもらって感じ取れる状況というのはやはり違うんです。やはり全国でストーンと落ちるような状態にならないと、どうしても統一国家論のようなものに流されてしまうのではないかなと感じます。

— 歴教協の大会で勉強をしたという感じになりますか。

そうですね。いろいろ肌で感じたということが数多くあります。

— 編集長もされてと伺いました。『歴史地理教育』にも過去のご苦勞を書かれていましたが<sup>22</sup>、とても大変であったかと思います。編集で心掛けていらしたことは何でしょうか。

原稿が偏らないようにすることです。要するに、地域的にあるいは内容的に。誰それに原稿を頼もうというときに、頼む人間の側に一定の思想的・地域的枠組みがありますからね。通信をキャッチできる、それをひと枠超えて頼める状況をどう作るかという、難しいことですよね。組織的という言葉を強調しすぎると、味も素っ気もないものになって面白みがないと批判されることも出てきます。

— 毎月発行ですよ。編集の大変さと財政面の大変さを書かれていましたが<sup>23</sup>、編集の仕事はほぼ毎日ですか。

そうですね。同時に、3 か月分の内容を軸にして回っています。仕事は毎日ですね。

---

<sup>22</sup> 鬼頭明成「機関誌「還暦」の足跡を訪ねて」（『歴史地理教育』第823号、2014年）。

<sup>23</sup> 同上、68頁。

家に帰ってきてから原稿のことで電話が入るでしょう、それが夜中の12時過ぎに、1時くらいまで続くような状態で、妻にあきれられました。それに、不渡りを出したらアウトです。誰からだったか、「れっきょうきょう」（歴教協）の「きょう」は「狂」だと言われたことがありました（笑）。

— 歴教協とは別に、組合の教研（教育研究）には参加されていましたか。

町田工業高校の頃から参加していました。東京の教研集会にはけっこう顔を出していましたね。金沢でやった全国大会で報告させてもらったことがありましたが、今となってはどのようなテーマだったかも忘れてしまいました（笑）。

私は何か勉強する場が欲しいという気持ちがありましたから、都歴研（東京都歴史教育研究会）なり、全歴研（全国歴史教育研究会）なり、はじめは行きましたよ。だけれども、やるにつれ、そこで一生懸命やっている人の目標がやがて管理職になるというそのルート作りのためにやっているような人たちが多いのを知って、がっかりしてしまったという感想を持ちました。

— 管理職のお誘いとかなかったのですか。

ありました。教頭からあったのかな。「教頭を飛び越して、すぐに校長にしてくれるならいいですよ」と言ったら、「それは、できません」と言われました（笑）。以後、誘いはありません。

— 小石川高校にいらした1976年に「今月の教材研究 高校 一年間の授業をふりかえって<sup>24</sup>」で日本史の授業を振り返って書かれています。これが、鬼頭先生が『歴史地理教育』に書かれた最初かと思います。日本史は毎年お持ちになっていたのですか。また、他の科目はいかがでしたか。

そうですね。町田工業高校では社会科全科目、城北高校では世界史を中心にやっていたし、小石川高校に移っても日本史と世界史と両方やっていました。余儀なくされたという形ですが、ただ今日に至る過程で考えると、日本史の殻<sup>から</sup>を打ち破る視点の糧になっているかなという感じがします。

---

<sup>24</sup> 鬼頭明成「今月の教材研究 高校「一年間の授業をふりかえって」」（『歴史地理教育』第248号、1976年）。

- 一 〈日本史の殻〉と言われましたが、鬼頭先生はそこをすごく追求されてきているのを感じます。その考え方は、学生の頃からというよりは、教師になってからですか。

色々な要因があるのですが、一つは2度目の転居をした渋谷区の富ヶ谷という所になります。東大（東京大学駒場地区キャンパス）の裏手に当たる所ですが、そこに吉岡力<sup>25</sup>さんがいました。吉岡さんは本がいっぱい売れて、その印税をもとに歴史教育研究所をつくったと聞いています。その近くに住まいを構えたものだから、分からないままに誘われるままに出席しました。鈴木亮<sup>26</sup>、吉田悟郎<sup>27</sup>、久坂三郎などなどの錚々たるメンバーが顔を連ねていました。内容は、何のことやら本当に分からなかったです（笑）。だけれども、何かやっているな、違うな、と感じて、それが一つの刺激になりました<sup>28</sup>。

## 7. 実教出版『高校世界史』への参加

- 一 〈日本史の殻〉を打ち破るもう一つの要因は何でしょうか。

もう一つは、世界史の教科書づくりに関わったのが大きいですね。実教出版の『高校世界史<sup>29</sup>』です。

- 一 日本史の鬼頭先生が世界史教科書の執筆に参加されている点が、この教科書の大切なところかと思えます。どなたからお声がけがあったのですか。

誰でしたか。鈴木亮さんかも知れません。

- 一 鈴木亮先生ですと歴教協のつながりでしょうか。執筆者は歴教協の皆さんになりますか。

---

<sup>25</sup> 吉岡力：1908～1975年、西洋史。東京大学教養学部の吉岡は1954年に大学近くの自宅に歴史教育研究所を開設し、研究所紀要を発行していた。同研究所および紀要については、茨木智志「歴史教育研究所編『歴史教育研究』（1956～2002年）総目次」（『歴史教育史研究』第7号、2009年）を参照。

<sup>26</sup> 鈴木亮：1924～2000年、世界史教育。

<sup>27</sup> 吉田悟郎：1921～2008年、世界史・世界史教育。

<sup>28</sup> 鬼頭氏は『歴史教育研究』第58号（1975年）に「書評『日本民衆の歴史』」を執筆している。

<sup>29</sup> 『高校世界史』吉田悟郎・鈴木亮・大江一道ほか4名、実教出版、1978年3月31日検定、1979年1月25日発行（世史439）。1979～1983年度に使用された。その後に2度検定を通過して、1995年度まで使用された。

そうですね。歴教協でみんな知っていました。先ほど歴史教育研究所の話をしました  
たが、そのときのメンバーがだいたい重なります。

— 以前に引用させていただきましたが、月2回以上の勉強会、長期休業ごとの合宿  
と、鬼頭先生が書かれていました<sup>30</sup>。とても大変であったと思いますが。

本当に勉強させられました。勉強会、勉強会で、5年以上かな（笑）。実教出版か  
ら最初に話を持ち掛けられたときに、「こちらが執筆態勢をつくるのに5年以上かか  
る。場合によってはそのまま棚上げになってしまう場合もある。それでもいいか」と、  
念を押して始めた企画らしいです。だから、まず、最初に勉強会でしたね。

— 中心になったのは吉田悟郎先生と伺っていますが。

ですね。吉田悟郎、鈴木亮と広尾高校<sup>31</sup>在籍者が多かったんです。大江一道<sup>32</sup>さん  
が上野高校定時制<sup>33</sup>でした。どちらかというところ〈一匹狼〉的な存在でしたね。

鈴木亮さん曰く、「吉田さんの言っていることは、何を言っているのか分からない」  
と、「だけ不思議なんだよな、生徒は分かるんだよ」と、「吉田悟郎さんの話はどこ  
かに若者の琴線に触れるところがある」と、言っていました。

— 5年も勉強会をされて、どんな感じで進んでいったのでしょうか。特に印象に残  
ることは何でしょうか。

大変だったのは、いよいよ原稿を書いてそれを下ろす、校了にするというその前  
でした。やはり一人ひとりみんな意見が違うわけですね、一つの歴史事実について  
も。それから文部省からの注文があるわけです<sup>34</sup>。それにどこまで応えるか、あるい  
は応える必要がないかとか。それから従来の世界史の教科書イメージを突き破るとい

---

<sup>30</sup> 鬼頭明成「東アジア世界史の試み」（実教出版編集部編『高校世界史 指導書』（世史 439 教授用  
指導書）実教出版、[1979年]）。

<sup>31</sup> 東京都立広尾高等学校（東京都渋谷区東）。

<sup>32</sup> 大江一道：1928～2019年、世界史・世界史教育。

<sup>33</sup> 東京都立上野高等学校（東京都台東区上野公園）：定時制課程は2009年に閉課。

<sup>34</sup> 本教科書およびその検定については、茨木智志・大木匡尚「実教出版『高校世界史』白表紙本に  
見る1977年度の教科書検定について— 二谷貞夫所蔵本を中心に —（上・下）」（『歴史教育史研究』  
17・18号、2019・2020年）を参照。

うことに、真正面から取り組もうというのは吉田悟郎さん。それに対して、大江一道さんは、あの人の歴史観には学ぶところがあるのですが、「それじゃあ、授業する人間がない、そんなの出したって仕様がでないじゃないか。出そうとすることは無謀だ」と。

あの教科書の一つの柱としてあった13地域論をどこまで貫くか。それから、「重要事項とかアンダーラインを引いてどうのこうのとか、そういう形での教科書というのはもう通用しない」という意見に、「いや、それでは読み手がいない。仕様がでないじゃないか」という意見。ここのメンバーの考え方でようやく一致を見たとしても、外に出したらやはり無理なのではないかとも。文部省からの圧力があるし、編集者のほうでも売れなければ困るわけですからね。その辺をめぐっての話し合いというのは、やはり大変でしたよね。だから、<sup>いちがや</sup>市谷の旅館に泊まり込んで原稿を書いて、これで下ろそうということになると、寝なかったこともあったかと。そこから勤務校に行くということも何回かありました。

— 鬼頭先生が書かれた部分はどこになりますか。

東洋史の部分ですね。それで一番冒頭が日本なんですよ、世界史教科書なのに。まず、そこからして、どう書き始めるか。すごく難航しましたね。

— 初の試みだったかと存じます。

そうです。だから、出版社の人の発言だけど、まず宣伝に学校を回っても、「こんな分からない」とか、「世界史の教科書じゃないよ」とか、あるいは、「意味がない」と、すごく風当たりが強かったと聞きました。

— 鬼頭先生が日本史の立場から実教出版の『高校世界史』に影響を与えた部分があったと思います。他の世界史の先生たちに強調したのはどのようなことでしたでしょうか。

それを期待されてメンバーに加わったのですが。色々と意見を出し合った中であつたでしょうけれども、やはり現場でどこまで通用するのか。今我々が考えていること、提起していることがあります。私は若くて現場べったりの状況ですから、今我々が検討して出そうとしていることに無理があるのではないかとか、あるいは受け入れられないのではないかとか、そんなことは率直な意見として出しましたね。

- 鬼頭先生が実教出版『高校世界史』に関係されたのが、1974年から1977年検定、1979年使用開始ですから、小石川高校に移られて、歴教協や歴史教育研究所に参加されてという30歳代半ばのちょうどその頃になります。

そんな感じですね。だからお互いの活動の出発点が意識的に関わっているわけではないですけど、結果としてそうなっていったという感じでしょうかね。

- 実教出版『高校世界史』で勉強されていく中で、鬼頭先生が取り組まれていく『東アジア世界の中の日本歴史<sup>35)</sup>』、『国境を越えた日本史の学習<sup>36)</sup>』につながっていくのかと伺いました。これまで勉強されてきた日本史を逆にひっくり返されたという感じでしょうか。

やはり書くことによって、しゃべることによって、自分の盲点が見えてくるということがあるわけですね。その見えてきた盲点がまた別の活動を呼び起こすという、そんな形でちょうどその時期、時間的・精神的な余裕が出てきたことと関わり合っ、かなりあちこちに書かせてもらってというふうになっているのかと、自分なりに考えています。

## 8. 国境を越えた日本史の学習

- 鬼頭先生の『国境を越えた日本史の学習』では、日本史を単純に日本史の中でではなくもっと幅広く見ていく授業について、特に興味深く拝見しました。他にも色々お考えかと思いますが。

北陸のほうに居を構えていた<sup>しやくしん</sup>肅慎、〈みしはせ〉の国があつて、海を隔てて中国の方にも肅慎があるわけですね。日本海をはさんで両側に肅慎という民族の地名が出てくるにもかかわらず、なぜそれを一つのもので捉えて、倭からの勢力が及んできたときにそれに抵抗する動きを見せなかったのか。ちょうど東北で言えば、もっと後の時代だけ<sup>えみし</sup>蝦夷の勢力と同じような形で捉えられるのに、国境を壁にして中国側にも日本側にも一体のものとしての捉えがまだ出ていないのではないかと感じています。これは日本史、これは中国史と。私の経験の上でしかないのですが、中国側も肅慎についてはあまり乗り気ではないという感じがします。

だから、そういう点で日本史・中国史という壁があると、その中でどう交流して

---

<sup>35)</sup> 鬼頭明成『東アジア世界の中の日本歴史』あずみの書房、1990年。

<sup>36)</sup> 鬼頭明成『国境を越えた日本史の学習』教育史料出版会、2007年。

いたのか、意思疎通を図っていたのかという側面でしかありません。ことによると、学習指導要領での日本史と世界史の一体化というものも、その域を出ないのではないかと、そんな感じがしています。

— 「蒙古国牒状」拒否は正しかったのか<sup>37</sup>」では、元寇についての従来の見方に対する疑問があるかと思います。先ほどの実教出版の世界史教科書でのご経験が関係するのでしょうか。

そうですね。やはり、あれ、おかしいな、どうしてだろうと疑問を抱かせる糧になっているのではないかと思います。撃退してよかった、勝ってよかったという印象や感想を持つのは、どういう勉強を進めている人間にとってもそうじゃないと考える、あそこで勝ったと幕が下ろされたところに問題があると捉えると考えるのは、かなり大変な違いがあると思いました。だから、むしろ生徒のほうが「勝って、なぜ、よかったの」ということを考えている者もいる状況だと思うのですよね。他のものでもそうだけれど、あまり論証して詰めていくと、これ以外の道はなかったんだと深入りして行けばいくほど視野を狭くしていく。そのような状況に陥る可能性はないのか。蒙古は野蛮人で、日本が、—— 日本という言葉を使うのがよろしくないのだけでも——、やられてしまう、あるいは取られてしまう。そういう考え方は誰かれ問わずどこかにあって、「負けたら負けたでいいじゃない」というふうにはなかなか言えないというのが実態だと思うのですよね。それを今のこの現代の世界ならともかく、歴史をどういうふうに見ていくか、客観視していくかということが重要なのではないかと思います。

## 9. 日本史授業ノート・ホームルームノート

— 鬼頭先生ご自身は、はじめからそのようにお考えでしたか。

いや、そうではありません。日本史の授業が終わった後、感想を書かせたノートを読むと、自分を一枚超えているなというのがあります。この子なら、吉田悟郎さんの話も受けとめられるだろうとも思いました。

— （保存されているノート）を拝見します。日本史授業ノートとホームルームノートが50冊ほどあります。生徒は交代で書いているのですか。

---

<sup>37</sup> 鬼頭明成「「蒙古国牒状」拒否は正しかったのか」、同上書所収（歴史教育者協議会編『歴史教育・社会科教育年報 1996年版』〔三省堂、1996年〕掲載の論考を改稿）。

そうです。書くのは一人です。授業ノートは「その日に感じたこと、授業を通して感じたこと、必ずしもストレートに授業と関わらなくてもいい」と言っていました。授業の翌日の朝に持って来させて、それを読んで次の授業の初めに紹介したり、コメントしたりして、それで出席番号順に次の生徒に回していくというものです。

— 「たぶん先生が書けと言ったことと、全然違ったことを書いてしまったと思う」と、この生徒は書いています。鬼頭先生のコメントもあります。3 ページにわたって隙間なくと、ものすごい量を書いている生徒もいます。

それを紹介するものだから、次にその紹介を受けて書く生徒もいれば、関係なしに授業を受けて書く生徒もいて、色々ですね。お互いに競争で、色々なことを書くようになります。生徒同士がお互いを鍛え合うというのは、教師に言われて鍛えられるよりも、生徒間で意見をこういう形でもって言い合う、書き合うのが、認識力を増すんですよ。

— ホームルームノートも4月以降だんだん気合が入ってきて、後半になると、みんな競い合って書いています。ノートの日付を見ると戸山高校のものが多いようです。これはご自身で考えられたのですか。

自分で考えました。小石川に移ってからだったか。こういうことやると、書ける子にとっては励みになって馬力がかかって、いいのだけれど、苦手な子もいるでしょう。量や内容は別にして、そういう生徒にどう劣等感を持たせないで書かせるかですね。ノートは処分しようとも思ったのですが、もったいなくて取ってあります<sup>38</sup>。

— 生徒が感じたことを大切にされていますが、授業ノートの他にもありますか。

スタートがこれと一緒に分かりませんが、城北高校のときに、ちょうどベトナム戦争がありました。世界史でしたか、授業で私が「アメリカは勝てない」と言ったらいいんです。ある生徒が授業を聞いて、「先生はアメリカが勝てないと馬鹿なことを言っている。ベトナムとアメリカが戦って、アメリカが負けるはずがないと思った。そのときは、そういう気持ちを恥ずかしくて言えなかったけれども、結婚して子

---

<sup>38</sup> 授業ノートについては、鬼頭明成「授業ノート」をどう利用するか（『歴史地理教育』第320号、1981年）でも取り上げられている。

どもができて、子どもを守るのが親の務めだと考えたときに、先生があのとときにこういうふうに言っていたのは、そういうことかと気が付いた」という長い手紙を、担任ではなかったけれども 10 年くらいたってくれました。だから、その子が子どもを持って初めて民族という力に気が付いたという。これはやっぱりすごいなと思いました。それ以来、今でも時々手紙をくれたり、他の生徒を交えて会ったりもしています。

そういう分かり方というのもある。授業の中でその日のうちに書いて提出するのとは違った、時間のかかる分かり方をしているけど、本当に理解できているというか、ストンと落ちているというか、ということかと思えます。だから今、わかる授業とか、わかり方の問題とかが色々言われているけど、そう簡単に「こうしたら、わかるんだよ」とは言えない。うっかりわかった、わからないと結論付けちゃうと誤解を招くということがあるかもしれないですね。

## 10. 史料をもとにした日本史授業

— 鬼頭先生が授業について書かれたものを拝見しますと、史料の使い方がすごいと感じるのですが、史料をもとにしての授業は最初からされていたか<sup>39</sup>。

そんなことはないですね。史料批判は当然、必要です。お説教じみたことが入ってきますし、その要素も含まれますし、生徒に考えろと言いながら考える材料がおそまつで、これでは考えようがないよと言うようなものが出てしまうこともありますし、なかなか難しいですね。だから、念頭に考えてみようという、自分自身の頭で考えるというのが授業のスタートにあると思うんですよ。そのときに何を根拠にして考えるのか、あるいは結論を導くのか、そういうのが次の課題になってくる。そのときにどういう史料を与えたらいいのか、どういうアドバイスをしたらいいのか、それが順繰りに出てくるのでなくて、リアルタイムに生徒の思考を促すというのが大切ではないかと思えます。ただ、なかなかそうはいかない(笑)。

— 鬼頭先生の場合、取り上げている史料のすごさを感じますし、どの時代の授業でも研究状況をすべて確認した上で、実際の授業でこの部分でこういう史料を使っていくというスタイルかと存じます。いつ頃から創り上げていらしたのでしょうか。

色々な場で勉強させてもらったということの積み上げでしょうかね。

---

<sup>39</sup> 鬼頭明成・前掲『国境を越えた日本史の学習』の第2章「生徒と考える日本前近代史の授業」、第3章「生徒と考える日本近現代史の授業」に収録されている論考などを参照。また、小松克己・大野一夫・鬼頭明成・石井建夫『資料で学ぶ日本史 120 時間』(地歴社、2012 年) などもある。

## 11. 中国・韓国との歴史教育交流

— 中国・韓国との歴史教育の交流について伺います。最初に 1987 年に中国の歴史教学研究会<sup>40</sup>の大会に招かれて参加されています。1984 年のシンポジウム<sup>41</sup>の返礼としてとありますので、比較史・比較歴史教育研究会のメンバーとしての参加になりますか。

比較史（比較史・比較歴史教育研究会）ですね。比較史は、発足したのが 1982 年だったか、私自身も入っていました。規約もなく、「思ったことを好きなように話し合おうや」という感じのスタートでした。成瀬治<sup>42</sup>さん、吉田悟郎さん、西川正雄<sup>43</sup>さん、そういう人たちは外国にコネクションがありますから、歴史教育上の著名人が日本に来ると時間を割いてもらって話を聞くという学習会的なものから始まりました。とにかく話を聞こうと、それでお互いに喋りたいことを喋ろうと。そんな自由な雰囲気の中でスタートしているので、自分も振り返ってみて、いつから入ったのか、定かではないのですが、とにかく、そんな感じの会の発足とともに、勉強し続けてきたという感じです。

— 1987 年のときは、安徽省涇県<sup>44</sup>に佐藤伸雄先生・二谷貞夫先生と行かれて、「日本の歴史教育の現状と課題」を報告されたとあります<sup>45</sup>。中国との交流では、はじめは討論がかみ合わなかったこともお書きになっています。

こちらとしては積極的な歴史観の訂正や従来の歴史観・歴史認識の見直しとか、そういう踏み込んだ、国際的な視野に立っての実践研究の交流を通しての学び合いのようなものを考えていました。ところが中国の場合はどうしても国家の代表という立場で出席していますから発言というのはフリーに行えないんですよ。何か、こう、かみ合わない、もどかしさを感じるというそんな形でのぎくしゃくしたところがあり

---

<sup>40</sup> 中国教育学会歴史教学研究会。

<sup>41</sup> 1984 年 8 月 28・29 日に比較史・比較歴史教育研究会が東京大学（駒場）で（第 1 回）東アジア歴史教育シンポジウムを開催した際に、中国の歴史教学研究会の 3 名が招かれて報告していた。

<sup>42</sup> 成瀬治：1928～2016 年、西洋史。

<sup>43</sup> 西川正雄：1933～2008 年、西洋史。

<sup>44</sup> 安徽省宣城市涇県。

<sup>45</sup> 鬼頭明成「中国教育学会歴史教学研究会年会参加記 2 教育改革を担う歴史教育の課題」（『歴史地理教育』第 427 号、1988 年。鬼頭明成・前掲『東アジア世界の中の日本歴史』に収録）。また、鬼頭明成「中国教育学会歴史教学研究会に招かれて」（比較史・比較歴史教育研究会編『「自国史と世界史」をめぐる国際対話—比較史・比較歴史教育研究会 30 年の軌跡—』ブイツーソリューション、2015 年）では、このときの「余談の一端」が記されている。

ました。

— それは、最後まで変わらず、ですか。

少しずつ変わった感じはします。そんな大きな変化はないですが、韓国に比べると制約があるという感じがします。中国から来た場合にも、もっと率直に言えばいいのに、というもどかしさがありました。ただ、我々がこれを成功と考えたのは、来れた、行けた、実践の交流が行なわれた、それができたのが第一歩の成果だったと思います。

— シンポジウムが4回ありましたが<sup>46</sup>、歴史教育交流という意味で、鬼頭先生はご自身でどのように位置づけていらしたのでしょうか。

やはり韓国と中国の差は感じますね。韓国から招いた人たちは、そうそう制約があるわけではない。中国の場合はどうしても本音は出さないという、それが自然であるかのように考えているみたいでした。ただ、台湾の人は微妙な感じで、やはり違いますよね。中国の中でも北京を拠点とする研究というのは、おかみ中心で、中国東北部とかあるいは四川省だとか、上海とかになると、歴史教育の中身や取り組み方にも差が出てくる。それは地域の差だけでなく、それだけ時間を経ている証かなと言う感じがします。特に上海はいわば国際都市であると同時に政令都市ですから、北京とかなり違いましたね。回を重ねるごとに違いは明確になり、むしろ、それが自然であるとの印象を深めてきました。

— シンポジウムで特に印象に残っていることはどのようなことですか。

今の話と関係あるけど、何回目でしたか、「日本の戦争責任をどのように考えるか」と、誰か質問しました。そうしたら中国の代表でしたか、「一般の日本人は悪くない。言われて仕方なくやった人が多い。そういう点では一般の中国人も日本人も一種の犠牲者だ」と発言したんですね。そうしたら韓国の方がいきり立ってね、「それは違う」と。「自分の親を殺したのは、天皇でもなければ、軍のトップでもない。家に帰れば

---

<sup>46</sup> 比較史・比較歴史教育研究会は東アジア歴史教育シンポジウムを、前述の1984年（第1回）に続けて、1989年（第2回）、1994年（第3回）、1999年（第4回）に開催した。その概要については、比較史・比較歴史教育研究会編・前掲『「自国史と世界史」をめぐる国際対話—比較史・比較歴史教育研究会30年の軌跡—』を参照。

普通のお父さんであり、お兄ちゃんという一般の人たちがやった。そういう人たちに戦争責任がないと言えるのか」と、すごい剣幕で発言したことがあった。その辺やはり戦後何十年たっても、歴史的なものの見方というのは一様ではなく、歴史的体験は拭い去れないものだと強く感じましたね<sup>47</sup>。

— 私（茨木）は 1993 年に中国遼寧省の瀋陽で鬼頭先生と一緒に報告をいたしました。そのとき鬼頭先生はアイヌの授業のことを報告されましたが、中国の皆さんはあまりピンと来ていなかったともお書きになっています<sup>48</sup>。

そうですね。国って何だということにもなってきますけれども。歴史教科書が北京、東北部、上海、四川など 5 種類になって、地域でかなりニュアンスが違うんですよ。その中でも北京が一番強いのですけど、歴史の見方にかなり差がある。今はどうですか。

— 最近は再び国の一種類に戻る感じで、しかも少数民族言語の歴史教科書がなくなったように、ひどくなっているようです。鬼頭先生は韓国にも行かれています、外国との歴史教育交流の意味をどのようにお考えでしょうか。

一言でいえば、お互いを認め合うということではないでしょうか。よく口にはしますが、日本史と世界史の統一的把握ということが、何が統一的把握なのか、そこが分からないんですが、ただ私は今の、そしてこれからの課題というのがそういうことじゃないかなと思います。

新しい学習指導要領をきちんと読んでいないのですが、どうしても交流史になってしまっている。こういうことがありましたよと。それは下手すると今の中国にあるように、それぞれバラバラなのに、バラバラでないものにして交流し合うと、意図的にまとめてしまう。それまで正しいと思われていた価値観を突き崩して、対等なものとして歴史というものを見ていくということが、今は欠けているのではないかと、そんな感じがするんですよ。

---

<sup>47</sup> 鬼頭明成「『自国史と世界史』の課題—第二回東アジア歴史教育シンポジウムから—」（『歴史教育研究』第 74 号、1990 年）。

<sup>48</sup> このときの鬼頭氏の報告は「東北アジアの動向とアイヌ文化の形成—中国教育学会歴史教学研究会年次大会報告（瀋陽・一九九三年）—」（鬼頭明成・前掲『国境を越えた日本史の学習』。初出は『遼寧教育学院学報』第 53 号、1994 年）を参照。また、「日中歴史教育交流の展開」（鬼頭明成・前掲『国境を越えた日本史の学習』。初出は、歴史教育者協議会編『歴史教育・社会科教育年報 1994 年版』三省堂、1994 年）でも言及されている。

だから、私にとって非常に役に立ったのは、さっき触れたけれども、例えば歴教協で組織部に入って全国を回る仕事を仰せつかったり、機関誌づくりを通じて全国の色々な分野の人たちから原稿をもらったりしたわけですよね。そういうときにやっぱり日本は一つではないと感じる機会が非常に多かった。今、国が目指しているのは、日本は一つ、団結してという思想的な統一を図って、民族の統一を高めるといふ国家としての課題のようなことがあって、割合そういう考え方というのは受け入れられやすい。バラバラがなぜ悪いの、いろいろな所に、いろいろな人がいていいと、そういう感じになかなかかなりにくいのではないかと。アイヌの人たちと交流したときに、アイヌにはアイヌの人たちの文化がある。言われてみれば当たり前だけど、どうしてもそのように思いたくないところが、東京にずっと住んでいて北海道を見たときに出てきますよね。そういったところがこれからの歴史教育の課題かなと<sup>49</sup>。自分にとって課題と言うほどの時間はもうないけれども、今まで勉強してきて、このように感じましたね。

## 12. 都立高校定年後の取り組み

— 改めて都立高校定年後のことについて伺います。首都大学東京（東京都立大学）で非常勤講師をされていましたが、何を担当されていたのですか。

社会科教育法です。本多さんもやっていたんですよね。専任が担当していたのが、嘱託なり非常勤の形で現場を知る中高現職教員が教壇に立つようになりました。

— 都立大で教員免許を取りたいという学生は多いのですか。

いますけど、多くはないですね。10人に満たない人数です。少なくなっているのではないかと思います。大学院で免許取ってという人もいました。

— 立正大学のほうが幅広く担当されていたのでしょうか。

何でもやらされました。非常勤をやっていて、都立高校の嘱託を65歳でやめて、すぐに立正の特任になってでしたか。教職課程科目を置かなければ教員免許取得の資格を大学に与えないとなっていて、そんな関係で私が専任として特任教授に任免されて75歳まで勤めました。

---

<sup>49</sup> 鬼頭明成「歴教協主催第三回夏の北海道旅行 肌で体験できた民衆史運動」（『歴史地理教育』第298号、1979年）、など。

— 立正大学では、中学校における校内暴力についての考察<sup>50</sup>をお書きになっています。これは、どのようなきっかけで取り上げられたのでしょうか。

忠生中学校の校内暴力（1983年）がクローズアップされ、それを鎮めた校長が英雄視されてという動きがありました。そういう形でマスコミによって報道されている内容と、実態とはちょっと違うよと言う人が結構いて、それはやはり一言言っておかないと、まずいかなというそんな気持ちがありました。一般の教員はずいぶん苦労したんですよね。ところが、その苦労が全然表に出てこないで、校長だけがマスコミ受けしてしまうというそのような風潮がありました。だから書いたのだらうと思います。

— 特活（特別活動）についても書かれています<sup>51</sup>。特活についての論考は初めてではないかと思いますが。

そうかもしれません。特活を持つ教師の奴隷労働のようなものに対する非難として書いたのではないかな。特活は持ち時間としてはカウントしないわけですね。それでいて一番苦労の多い、何かあれば責任を取らされるという、そういうような仕組みを批判するような気持ちで書いたのではないかと思います。

— 改めて特活についてお書きになったのは、環境が変わってということでしょうか。

心理学部に所属していることを利用してということはありませんけど、意識して、まとめられるものは、まとめておいたほうがいいかなという感じですね。自分自身が特活で苦労した体験はありません。小石川高校のときにワングル（ワンダーフォーゲル）部の顧問を頼まれました。まわりは50歳以上でしたので。それにはまりこんで、退職するまで山岳部の顧問をやり続けました。個人で、南北アルプス、八ヶ岳、中央アルプス、越後三山、鳥海山、磐梯山、大体その範囲の山は登りました。引率では甲府から入った鳳凰三山、北岳、農鳥岳とか、大菩薩峠とか、南北アルプスも引率して、だいたい4泊5日くらいですね。私立だと5泊6泊でも許されるのだけど、都立は当時駄目でした。

---

<sup>50</sup> 鬼頭明成「中学校における校内暴力に関する一考察」（『立正大学心理学部研究紀要』第7号、2009年）。

<sup>51</sup> 鬼頭明成「学習指導要領にみる特別活動の位置づけと学校教育の課題」（『立正大学心理学研究所紀要』第5号、2007年）。

— 山岳部は、今は伝統校にしかないと聞いています。

今は、新聞部と山岳部はひとつのステータスみたいで、両方あるのが伝統校ですね。つま先ひとつで体支えていますから、死と紙一重ですからね。よく 60 歳まで生徒と一緒にやったと思います。

— この論文では日の丸・君が代の問題もお書きになっていますが、鬼頭先生が都立高校に入られたときは、学校に日の丸・君が代は全然なかったのですか。

なかったですね。

### 13. 歴史総合について

— 歴史総合について、お考えをお聞かせください。

私は学習指導要領もちゃんと読んでいないし、実践もしていません。ただ、歴史総合が作られるときに、学術会議の歴史部会でしたか、油井大三郎さんが座長になって、油井さんを知っているものですから、私も意見を求められて、2~3 回出たことがあるんです。けれども、話を聞いていて、何かちょっと違うなど、日本史と世界史のごった煮になってしまわないかと、そういう懸念は感じました。それがうまく溶け合えば、いいけれども、単なる寄せ集めになってしまうのではないかと。中に入って色々言っていけばいいじゃないかと、油井さん自身はそういうつもりなんだろうけれども、いざ組織の中に入れば、そう簡単にはいかないですからね。だから、スタート時点に戻ると、そんなような立場でした。

内容的には、きちんと読まないで言うのはよくないのですが、やっぱり日本史と世界史の寄せ集めの感を免れないのではないかと思います。最初に扱う時期が明治維新の頃か江戸末でしたか、歴史総合という言葉がいいかどうか分からないけど、もしもそういうものを目指すのならば、従来の日本史と世界史の単なる寄せ集めではなくて、それを統合した形で新しい歴史的視点というものを投げ込むようにしないと意味がないのではないかと。下手をすると、日本史の特徴というところから、日本文化の広がりだとか、あるいは精神主義だとかに持っていかれる危険性はないのか、そんな懸念を持っています。国家・国境の枠を越えた地域社会、多民族社会の視点から、彼らが目指した（今も目指している）共同体の存在を前提にして歴史を捉えなお

すことが課題であろうと考えています<sup>52</sup>。

#### 14. 歴史教師として大切にしてきたこと

— 鬼頭先生が歴史教師として大切にされてきたことをお聞かせください。

自分の考えていること、その結果やっていること、そういうことに対して生き甲斐を感じ、自信をもってやっていくということなのかと思います。ぶれない、揺れない、今日も話した安保闘争が自分のバックボーンになっているというのは、そういうぶれない一つのあかしではないかと。実はぶれればなしかも知れませんが（笑）。それと自分自身が興味や関心を持たなければ、聞くほうは、勉強するほうは付いてきませんよね。だからまず何事であれ、自分が興味関心をもってそれに取り組む。そのことが直接、授業に関係なくてもそういうスタンスというのは生徒に伝わっているのではないかという感じがします。

— それを大切に、鬼頭先生は取り組んでいらしたと。

特に意識はしていないですけどね。ただ、言われてみると大事にしてきたものというのは、そういうことでないのかなと思います。

— 本日は長時間にわたってお話をお聞かせくださりまして、本当にありがとうございました。

#### 後記

体調が万全でない中、長時間にわたってお話をお聞かせいただき、さらに原稿を作成する段においても幾度もご無理をいただきご教示を拝受した。鬼頭先生の手掛けてこられた日本史の殻を破り、史料を活用した日本史授業の取り組みの背景にある様々な経験、試み、思索、交流などの軌跡は、非常に興味深く、後進の我々に重要な示唆と同時に、大きな課題を提示されたものと受けとめた。

最後に、鬼頭先生に心から御礼を申し上げますとともに、様々なご協力を賜りました奥様にも感謝を申し上げます。

（注記に関して、様々な文献やホームページ等の情報を利用させていただきましたことを申し添えます。）（文責：茨木 智志）

---

<sup>52</sup> 日本史教育の歩みから「歴史総合」などの近年の歴史教育の課題について、鬼頭明成「日本史教育70年のなかで」（『中等社会科実践研究』第2号、2017年）で提示されている。